

令和元年度 富山県地域包括ケアシステム推進会議

日時 令和元年7月25日(木)

13:30~15:00

場所 県民会館 バンケットホール

1 開 会

2 挨拶(富山県地域包括ケアシステム推進会議会長 富山県知事 石井隆一)

3 議 事

(1)報告事項

- ①地域包括ケアシステム構築に向けた県の取組みについて
事務局より資料2に基づき説明

(2)意見交換

(会長)

先に今日ご出席の委員の皆様方の団体での取組みや地域包括ケアシステムの普及啓発や担い手のすそ野をさらに広げていくための取組み、事務局からの只今の報告等についてご意見があればいただきたいと思います。

高原委員、地域で医療・介護を支えていらっしゃる立場でもありますので、何かご意見はございますか。

(高原委員)

私はケアマネジャーですが、地域で支えあう取組みは全県的に進んできているという感触を持っています。地域住民の方ももちろんですが、介護に携わる事業者の方でも、法人の社会貢献といったら大げさですが、いろんな法人の方と協力しあって地域住民の方が集える場の提供というのを、いろんな方々と協力しながら地域の皆さんに有益なもの、集まれるものを一生懸命取り組んでいるところです。

私たちはどちらかという繋ぎのような役割が多いものですから地域の実情を行政等にしっかりとお伝えして、県内でもこういうふうなことをやっているよということを周知する場の提供をしていきたいと思います。以上です。

(会長)

大変ありがとうございます。それでは勝田委員、よろしいでしょうか。

(勝田委員)

ありがとうございます。私たちは認知症の当事者団体で県内の4か所で毎月10回ぐらいの

認知症カフェを開いています。私たちは本人と家族と一緒に来ていただいて一緒に楽しむということを大切にしています。

今、国や県をあげて認知症をいろんな形で応援してくださっていること、とても嬉しく思います。9月21日は世界アルツハイマーデーということで、私たちは全国でリーフレット40万部くらい作っていますが、県のご協力で全県下の地域包括支援センターや介護事業者と連携しながら、富山県では約25,000部を配布させていただくなど、皆さんと一緒に活動させていただいていることを、とても嬉しく思っています。今後とも宜しくお願い致します。

(会長)

ありがとうございます。それでは高橋委員、いかがでしょうか。

(高橋委員)

地域包括ケアの様相が深化と同時に発展するということで、そのことを皆様方に共通の理解を持っていただきたいということと、富山県が県民を巻き込んだ運動として展開しようとしていることの意味が改めて明らかになってくる。そういうことで資料を用意してきました。

1枚目は地域包括ケアが、どういう来歴で使われるようになったかという、おさらいです。このことを意外と知られていないということを知りまして、1970年代の寝たきり老人ゼロ作戦というのが広島県の山口昇先生が提唱されて始まりました。これがナショナルプロジェクトになりましたが、ここで山口先生が地域包括ケアという言葉を始めお使いになりました。これを2005年の高齢者介護研究会、これはさわやか福祉財団理事長の堀田力が座長で私も参加していましたが、そこで介護保険改革の概念として近代年に導入を致しました。その後政府の社会保障の一体化の中で使われるようになり、慶応大学の総長だった清家先生が座長でございましたけれども地域還元型の医療介護というのは、これからの社会保障のキーワードだとおっしゃりまして、その中で地域には丸ごと支援が必要で、これが近年地域共生社会、これは諮問会議の中で、その当時厚生大臣が提起されてキーワードになりました。

また地域包括ケアと地域行政社会が一体で使われるようになってきて、実は富山県は地域共生社会がかなり先進県ではないかと思っています。有名な慶応大学の井手英策先生がそういう理論をされているのを富山県の方はご存知でしょうが、そういう意味でいえば、まさに富山の地域がらというものと地域共生社会、非常にいろんな意味で線的な活動が弱化しているというわけで、2つだけ申し上げます。

1つは高齢者福祉課が所管の高齢者の問題ですが、高齢者は今や100年時代だと、これは政府も言っていますが、人生50年、60年の構造の中で作られたケアの仕組みがもう役に立たなくなっている。それは負の遺産として残っているわけです。かなり耳の痛いことですが富山が病院医療も福祉も施設も充実しているところですが、それ自身が正しい時代にどう取り組むのかということが県はある意味で、ほぞを固めて政策を再構築されるべきだと思います。

それから「フレイル」、「虚弱」という言葉が最近使われるようになっていきます。今までは脳卒中で発作を起こして絶命するか寝たきりになるかという選択でした。こういう方たちは少数になります。認知症もフレイル問題のひとつですし、ガンの場合は自立した社会活動を続けながら療養するというケースが非常に増えていて、そうなりますと私たちは寝たきり病

人問題としてシステムを作ってきたとして、それを大幅に切り替えなきゃいけない。それを中心に出てきたいろんな議論の中でフレイルというのはどういうものかは、大変面白い調査がありまして、人との交流を綿密にやっていると元気が続く、これは千葉大学の近藤克則先生が膨大な調査をやられて、そのエッセンスを持ってまいりましたので後でご覧ください。

それから笑わない人の脳卒中リスクは1.6倍あります。要するに健康とか口腔ケアや栄養と同時に社会関係が非常に重要で、臨床についてはエビデンスが出てきていますので、これは地域をどう作っていくかということになります。

もう1つ大変面白いデータを最近見ていまして、富山県の高齢者の貯蓄額というのは全国トップだそうです。これは慶応大学の今村昌平先生の研究ですが、ファイナンスゼロ老人という言葉をお使いになって資産を持っている高齢者の皆さんがもし認知症になった時、いろんな問題が起こる。金融機関はその問題をものすごく悩んでいるはずですし、商店もそういう意味では認知症の方の買い物どうする、去年買い物サポートの報告をいただいたかと思いますが、そういう部分も含めて問題です。

もう1つは不動産を所有する高齢者がこれからどんどん増えていくので、空き家問題の前にこの問題をどう取り組むかということですが実は福祉の問題と捕まえていると全部スルーしてしまいます。現実には自立した生活を送るうえでは、こういう視点は事業者と地域と行政が協力しなければいけないテーマということを申し上げます。

地域共生社会という理論の中で地域包括ケアは深化・発展だと言っています。おそらく先ほどの報告もそうですが専門的な支援と同時に地域住民の参加を活性化することが重要で、それは単に高齢者の地域包括ケアではなくて地域丸ごとと書いていますが、障害児、難病、生活困窮者、母子家庭、そこに地域包括ケアがアプローチを広めていく、その場合には住まいと住まい方、それから地域づくりが車の両輪になるとすると、高齢者と医療関係者だけではない、厚生部だけではない仕事になりつつある。このことを、これから人口減少社会となりますので富山の場合は非常に深刻な、とりわけ山間地域は深刻な問題です。このような問題と地域包括ケアと地域共生社会は非常に重要です。

それからもう1つだけ申し上げます。地域づくりに資する厚労省の資料を最後に付けておきましたが、それぞれの部署が所管しているものを一般的に運用できるようにするという考え方が厚生労働省から示されました。はっきり申し上げまして一番邪魔をするのは役所です。最近も会計検査院がこういうものを使うのはいかがなものかという監査結果を出して、行政職員が頭を抱えたという話を聞きました。そういう意味では行政、市町村、県も含めまして少し考え方を切り替えていく必要がある、これはおそらくトップリーダーのリーダーシップによるところが非常に大きいと思いますので、地域の住民が活動しやすい政策の在り方をぜひご検討いただきたい。しばしば行政は地域住民を邪魔することがあります。さんざん私は目撃してまいりました。富山県で目撃したわけではありません。東京で目撃しています。そうではなくて、地域の活動を活性化するための、いろんな仕組み作り、施策の打ち方も相当工夫の余地があると厚生労働省は既に言っていますので国として、これを富山方式を是非作っていただきたいということを申し上げて、発言にかえさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

(会長)

ありがとうございます。

これまでのご発言、それぞれ貴重なお話ありがとうございました。高原委員はまさに地域で支えあう取組みが全国的に広がりつつあると、また法人の社会貢献も、だいた事例として増えてきているとお話がありました。出来るだけ地域の情報を行政に伝える役割も果たしたいとおっしゃいましたが、今お話が出たように我々行政の方も出来るだけ柔軟にしなやかな対応をしていきたいと思いますが、そうなるとうまたいろんな国の制度を練って見直していただくということも出てくるかなと思っています。

また勝田委員には世界アルツハイマーデーの話も出ましたけど認知症の問題について大変熱心に取り組んでいただき感謝申し上げます。先ほどご挨拶申し上げたように出来るだけ認知症は深刻になる前に早くから予防といいますか、進行しないような介護も必要だと思いますので、今年度からそうした脳トレとか、そういうことが心配な方に住民の方に気軽に相談いただけるような環境づくりを進めていきますので、またよろしく願います。

それから今、高橋委員からお話でしたが、人生100年時代ということになりますと、これまで人生50年、60年ということで設計してきたいろんな制度が基本的に見直さざるを得ない事態になっています。また、行政が地域のニーズにそって柔軟なお金の使い方をしようとかいって、行政が邪魔する場合がありますと、耳が痛い話もありました。その点は私ども富山型デイサービスという、従来の国の制度は、かつては高齢者は高齢者、障害者は障害者、子供は子供という縦割りの制度でしたが、25年ほど前に惣万佳代子さんたちが始めた富山型デイサービスは高齢者も障害のある人も小さな子供達も大家族で支えあって生きていこうと、お互いにケアしていこうという理念からスタートしていますので、国の制度に乗らなくて本当にご苦労されました。それを富山県、また富山市もまず国の制度に乗らないのであれば、県単で応援しようという話をつくりまして、国の特区制度を3回それぞれの規制を克服するのに3回チャレンジして、その都度全国的に成果も出たので全国展開して、とうとう2年前に当時の塩崎大臣、その後加藤大臣も現場をご覧になって決断をされて行政型サービスという新しい介護のパターンを作ってもらったという経過がございます。

余談ですが昨日まで全国知事会がありました。富山型デイサービスは県内だけではなく全国2千数百箇所まで広がってきました。全国で見ますと確か29くらいの県にありますが、それ以外の県には全くまだ無いような感じです。2年に1回この富山型デイサービスのセミナーを富山県で開催していますが、惣万さんや、そういう方々を募って全国から200人近い人が集まって、お話聞いていますと各地で既に富山行政型サービスをされている方もたくさんいらっしゃいますが、中には自分の県では是非こういう行政型サービスをやりたいんだけど行政当局が全く相手にしてくれない。いっそ富山県からそういう各自治体のトップに話をしてくれないかと要望をいただきましたので、一昨日、全国知事会でご披露して、皆さんに提案をさせていただきました。

また今、まさに人生100年時代ですから、お話したように厚生部だけでは対応出来ない問題がいっぱいあるので、教育委員会とかあるいは商工労働部とかいろんなところに入ってもらい、昨年1年かけて人生100年時代の人づくりの在り方というテーマで議論しました。また企業の生産現場をお辞めになっても、さまざまな形で社会参加していただく、またみんなが

いくつになっても周りから必要とされる人で在り続ける、そういったことが心身の健康に役に立つというようなことを皆さんで理解し合って、これからそういうことをしっかり進めていこうと考えています。また高橋委員、ご専門の立場からいろいろとご助言を賜ればと思います。

(3) 報告事項

②地域包括ケアシステム構築に向けた各団体等による活動報告について

(たてやまつるぎ在宅ネットワーク：佐藤かみいち総合病院 副院長)

中新川郡医師会のかみいち総合病院の佐藤幸浩と申します。本日はこのような機会を与えていただき大変光栄に思います。

「たてやまつるぎ在宅ネットワーク」で最後まで望ましく過ごすために在宅医療を中心として取り組んできたことを報告させていただきます。

「たてやまつるぎ在宅ネットワーク」は平成24年に医師会の先生を会長として作りました医療・福祉関係者、事業所、行政、そして福祉医療機関等の連携による在宅医療を支えるネットワークになっています。地域包括支援センターや訪問看護ステーションが協力し合って在宅医療を支える仕組みです。その中の活動の1つとして主治医、副主治医のグループ制があり開業医同士、開業医と総合病院、総合病院と開業医といった形の主治医、副主治医制をとっています。

当院と開業医が主治医・副主治医として関わった症例は平成21年から30例ありまして、そのうちの20例は在宅で最後を迎えています。そのうちの6例は、これは主治医、副主治医の副主治医が最後まで主治医に代わって、おうちでの最後を確認した症例であり、当院はそのうちの5例に関わっています。

また、情報共有のためにメルタスというワイズマン株式会社のシステムを使い、関わる関係者が情報を共有しています。

また、開業の先生にとっては、医療材料等を通常はたくさんの単位で買わなくてはならず、無駄になることが結構多いので、小分けで購入できるようにハートケアサービスさんのご協力をいただき、ホームページから購入できる仕組みをとっています。

それから急性期病院に入院して在宅の主治医がいない方が結構いて、退院に際して支障になることが結構あるので、当院がコールセンター役を担って、病院または開業医の先生に在宅担当医になっていただくことをお願いしたり、引き続き入院が必要なら当院で入院を継続していただいたりする形で在宅に帰っていただく手助けをしています。

「たてやまつるぎ在宅ネットワーク」の事務局は上市町にあります。平成27年から三部会を設置しています。全体の進捗を管理する支援体制部会、多職種研修の企画・運営をする多職種連携部会、住民の認識・醸成をする普及啓発部会、それぞれ活動をしています。

多職種連携部会では富山大学総合診療部との共催で実務者と学生が研修を行ったり、事例検討会を行う多職種連携研修「とやまいびー」を開催しています。

「とやまいびー」の報告書ですが、参加した方の満足度がのっています。在宅で過ごすために、どういうふうに支えたらいいかを実務者と学生が一緒になってテーブルを囲んでディ

スカッションします。

ワーク1として本人と支援者チームで今後の方針を検討して、どう支えていくのか、具体的なケアプランを作ります。ワーク2としてケアプランを使って在宅で支えて具合悪くなったときに最後は家で見ていくのか、入院するのかを検討します。

本日特に学んだこと・印象に残ったこととして、「地域の文化も在宅支援には大きく影響することがわかった」、「本人の意向に沿った支援について様々な意見が聞けた」、「各職種で話し合うと見えないことが見えてくる」、「協働、他職種を理解しながら、連携することの大切さを学んだ」、「在宅をサポートする手段をたくさん知れました」、「独居でも自宅でも最後まで過ごせる、たくさんの職種+地域の人で支えることの重要性を学んだ」という感想になっています。

普及啓発部会では在宅医療に関する住民向け講演会、出前講座を行うほか、在宅医療に関するリーフレットを作製しています。

その中で当院が行っている上市ナイトスクールを紹介させていただきます。日時は夜の時間ですが各地区公民館を回っています。今年度は、「あなたの思いや希望を家族や親しい人に伝えてありますか」というテーマで行っています。具体的にはグループワークを住民の方にやっていただきます。自分は家で死にたいと思っている方や、息子たちが東京にいる方、そして自分はピンピンコロリだから将来の心配はいらないと思っている方が話し合っていて、実際には寝たきりになってしまい、どうしようというようなストーリーを寸劇でやっていただいた後に参加者の方に、あなたが治る見込みのない病気と診断された時、あなたがご自分で判断することができなくなった時、あなたが望む医療や過ごし方を考えてみましょうということ、みんなで話し合っていて、最後に話し合いの内容を発表していただく形になります。

当院は平成21年から訪問診療に取り組んでいますが、その中でグリーフケア訪問に行ってきました。グリーフケア訪問とは、ご家族を亡くされて悲しんでいらっしゃる遺族の方のお悔やみ訪問のことですが、1人1人おうちで最後を迎えたご家族を訪ねていろいろなこととお伺いしました。グリーフケア訪問の記録から、「亡くなった時に先生が来てくれて本当に嬉しかった」、「町のお医者さんにもお願いしてあったので、何があっても大丈夫と安心だった」、これは主治医・副主治医制を組んでいたということです。あと、「訪問看護さんやケアマネさんにしょっちゅう電話していたのに、そのときには何も思いつかなかった」、「家で亡くなると警察が入って大変なことになると思っていた」などの感想が聞かれ、そういったことを元に訪問診療の体制を再構築していきました。

その中の1つとして、終末期を迎えるご家族を持っているご家族に最後が近付いている時、どういう様子になるかということ具体的なパンフレットとして渡しています。

そして、家で最後を迎えたい方が救急車を呼んでしまって大変になっていると、しばしば話題になっていますが、そうなる就非常に困るので当院と地区では必ず訪問看護ステーションに連絡していただくことを徹底していただき、救急搬送することは極力無いように工夫をしています。

あと中新川郡の資料を見ていただきたいのですが、最近訪問診療の数は、減少傾向にあります。これは開業医先生の高齢化等も関係しています。

介護老人福祉施設での看取り数は当地区には3か所ありますが、順調に増えています。

死亡数が600くらいなので在宅看取りが10%くらい、施設の数を入れると15%くらいの方が施設で看取りという形になっています。

1人の症例を紹介させていただきたいと思います。寝たきりの方です。医療診療を希望しない、本人は自宅で最後まで過ごすことを希望されていました。開業医先生が訪問診療していましたが、肺炎で入退院を繰り返す中で当院が主治医になり開業医先生に副主治医になっていただきました。そして肺炎で入院して更に1ヶ月後に肺炎で入院したときに、本人はもう入院したくないと、家で最後を迎えたいと意思表示がありましたが、ご家族は何とか治療してほしいと、ご自宅でサービス担当者会議を緊急で開催していただき、いろいろ検討したうえで訪問診療、訪問看護を使い、抗生物質を点滴することで、ご自宅で過ごしましょうということを、お話をさせていただきました。

そしてこの肺炎を一旦乗り越りましたが、その1週間後に再び肺炎になり、この時は今まで精一杯治療してきたので本人が望む状態で最後を迎えましょうということで、ご自宅で最後を迎えることが出来ました。

「たてやまつるぎ在宅ネットワーク」の活動について報告させていただきました。住民への情報提供、さらなる連携の深化、ITツールの有効利用などの課題に取り組み、在宅医療を推進し、住民が最期まで望むところで暮らせる地域構築の一助となりたいと考えています。どうもありがとうございました。

(岩城副会長)

佐藤先生、どうもありがとうございました。

それでは続きまして、富山県電機商業組合青年部の黒田部長から、まちのでんきやプロジェクトとしての高齢者の生活支援の取組みについてお願いします。

(富山県電機商業組合青年部：黒田部長)

よろしくお願い致します。富山県電機商業組合青年部長の黒田と申します。

本日は「親孝行応援プロジェクト」と題しまして「まちのでんきや」の活動をPRさせていただきます。富山県電機商業組合というのは、町の電気屋の集まりでピークの昭和58年の時は750店舗ありましたが、現在160店舗に減っています。多分5年後には100店舗を切るぐらいだと思っています。

最近、家電量販店やネット通販が台頭してきて、そこで購入されたお客さんが上手く使えないとか、接続できないとか、使い方がわからないという、購入しても使えないトラブルが非常に多くなっています。そんな中、「まちのでんきや」の活動をもっと知ってもらおうとPR活動を進めています。

そこで「まちのでんきや」というのは、あまり皆さんご存知ないと思いますので、映像をちょっと見ていただこうと思います。

(活動動画上映)

今の映像にもありましたが、僕たちの仕事の中心はこの「こんにちは訪問」という「御用聞き訪問」です。一切呼ばれてはいません。呼ばれてはいませんが、お客さんのところに勝

手に向かいます。そこの生活を知って今のお困りごとを自分で発見して家族を想う気持ちで対応させていただく、これが「まちのでんきや」の仕事です。

先程もありましたが、ご高齢の方って寒い、暑いというのがなかなか感じられなくて、エアコンを使わずに亡くなる方というのが去年3人いらっしゃったと聞きました。僕たちはお伺いして使っていない方には使っていただく。使う時に「風が嫌だ」と言われれば風を柔らかくする、そんな方法もご提案しながら、フィルターを掃除が出来ない方には代わりにフィルターを掃除してあげるといった活動を今メインでやっています。

昔はフェイスtoフェイスな仕事が多かったのですが、今非効率だとか経済性が悪いということで皆さんやめられました。でも「まちのでんきや」はこれを今でも続けています。当然高いところの電球が取り替えられない人には僕ら電球1個でも、さらにリモコンがきかない時はリモコンの電池1個でも交換に参ります。テレビ・冷蔵庫・洗濯機・エアコンなどの販売・据付けは当たり前に行っていますが、それと別にお風呂やキッチン・トイレのリフォームも僕たちの仕事です。シアタールームの設計なども行っています。あと、設備商品として太陽光発電やオール電化やペレットストーブ、太陽光の電気を貯める蓄電池であるとか、電気自動車もモーターと電池なので、家電製品になりまして僕らも販売しています。

あとスマホのアンテナ、光ファイバーの敷設、インターネットの工事、このような工事も僕たちの仕事です。

高齢者に多い悩みごとを機械の力で解決しようということで、腰が痛い・膝が痛い方、手足が冷えている方、夜なかなか眠れない方、声が聞こえにくい方、そんな方にマッサージベットや補聴器や温熱の布団、あるいは自分の枕を作ってあげると、夜眠れたりしますので喜ばれます。

ただこれだけが仕事ではありません。僕たちは熟年旅行ペアと題して、お年寄りと一緒にバス旅行を企画します。社員がバスとホテルを予約して現地へ下見に行き、この坂だと足の膝の悪い人でも行けるだろうか、この階段だと行けるだろうかと下見して、お誘いしておぶったりもしています。行った方には拝まれるように喜ばれます。なかなか人に誘ってもらう機会が無い方が多いので僕らと一緒に行きましょうという活動も電気屋の仕事です。

あと、地域の若者を作るということで今県内13の講座を小学校から上は大学、社会人までキャリアガイダンスとして「まちのでんきや」の仕事を通じて人に喜んでもらおうということを伝えて回っております。

僕たち「まちのでんきや」のお客様というのは地域に住む高齢のお客様です。ミッションは地域の人々がひとり暮らしでも安心して住み続けられる町を創る、このようなことを考えています。僕と一緒に写っているお客様は90数歳です。この距離で喋ってもほとんど聞こえません。それでも僕が行くと「あんちゃん、よう来たね」ということで、お菓子もお茶もたくさん出してくれて喜ばれます。このような信頼の基で成り立っているのが僕らの仕事です。

そんな想いの仲間たち「チームまちのでんきや」2018年度の取組みを紹介させていただきます。昨年度は親孝行応援プロジェクト、ホームページをオープンしました。名前は「転ばぬ先の電気のおつえ」というページを作りました。東京など遠方に住むお子さんが今は飛んで行ってあげたいけど、なかなか行くことが出来ない、ランプを変えてあげたい、あるいはリモコンの操作を教えてあげたい、でも出来ない人に対して僕たちが代わりにプロとして、近

くに住んでいる僕たちがすぐ対応してあげる、じゃあ、そんな会社はどこにあるのというのを発見しやすいように地図と地域をリンク出来るように作ったのがこのホームページです。

あともう1つ、こども110番の家というところで全店160店舗昨年登録させていただきました。なかなか物騒な世の中なので、子供たちだけでなく高齢の方でもいつでも来ていただける、そんな場の提供をしています。僕たち「まちのでんきや」というのは昔はお茶のみ場だったりして、人が集まる場所でした。全く同じような活動を続けています。

それともう1つ「まちのでんきや」の応援歌スマイリーライトというCDを発売しました。作ったのは「まちのでんきや」の2世のシンガーソングライターの河合良というのが青年部にいまして、青年部でコーラスを入れたりしています。ちょっと聞いてください。

(CD演奏)

なかなかちゃんとした唄です。これをやることで「まちのでんきや」にちょっと注目してもらったらなど、そんな想いでこのCDを発売してPRさせていただきました。

最期に今年度の取組みとして地域や行政や介護施設との連携を取っていきたいと思っています。実は家庭にある様々な家電を使うといろいろな情報が手にとるようにわかります。例えば、気温とか湿度とか明るさなどの住宅環境もわかります。ウェアラブル端末を使ってもらうことで、脈拍、睡眠量などもわかります。体重計に乗れば体重、血圧を計れば血圧、そういうデータをクラウドに吸い上げて、いろいろな機関と繋ぐことで独りぼっちの高齢者を独りぼっちにしないということが出来るようになりました。

例えば冷蔵庫の中にカメラを仕込んでセンサーでスキャンして牛乳が無くなったとわかれば、八百屋さん、近くのスーパー、生協さんなどが判定して自動的に届けるという買い物弱者の対応も出来ます。バイタル情報がわかれば昨日よりも今日血圧が急に上がったとわかれば訪問介護の会社に伝えたり病院に伝えたりすることが出来るようになります。今人手不足で毎日行ってあげたいけど行けないという人のお助けが機械で出来るようになります。例えば僕らみたいな電気屋、配管屋、ガス屋は機械からの情報がわかります。水漏れしているや、冷蔵庫の温度がちょっと高くなっているなどです。高齢のお客さんが自分で気づく前に電話してあげて「〇〇さん冷蔵庫の中のもの食べちゃダメだよ、お腹こわすかもしれないよ」ということがすぐに判定が出来るので、部品を持って届けることも出来ます。このように1人ぼっちの人をみんなが地域で見守ってあげる、そんなことが出来ないかと、いろいろ提案しています。離れた東京などの家族にとっては、「ああ親父今日は血圧も安定しているし安心だな」と、そんな安心を与えることが出来ないかと思っています。

「いつかは来る道、いつかは来た道」、このように僕は先輩方からいろいろ教わってきました。家族のように自分を想ってくれる人がいっぱい地域、そのような地域を作っていきたいなど「まちのでんきや」は思っています。ご清聴ありがとうございました。

(岩城副会長)

どうもありがとうございました。それでは続きまして「若竹支え合いの家」の七山代表から高齢者の集いの場づくりの取組みについてお願いします。

(若竹支え合いの家：七山代表)

富山市南部の若竹町の七山と申します。地域福祉を中心に現在最先端に到達しているのが「若竹支え合いの家」で、これからプレイバックして私の町の福祉活動をご紹介します。

「若竹支え合いの家」は平成31年4月13日にオープンしまして、厚労省の介護予防・日常生活支援総合事業の一環として取り組んでいます。住民主体の通所B型デイサービスこれを富山市のモデル事業として、今はまだ準備中ですが、これから参加して取り組んでいく予定になっています。

「2025年問題」は皆さんにはよくご存知のことで、非常に否定的なことばかりを言われています。「2025年高齢者が難民になる日」という本がありますが、確かに今こういう問題が出ていますが、むしろ私はこれを肯定的に考えて2025年には、団塊の世代が後期高齢者になり、地域ボランティアとして十分担えるということで、人的資源として私は考えています。

私どもが住んでいる若竹町の現状を申し上げます。昭和44年（1969年）に富山市が富山市南部に500戸の団地造成をしました。当時は500戸1,800人がいましたが今は460戸で1,200人になり、高齢化率も45%になっています。

みんな一緒に家を建て、車を持ち、子供を育て上げ、公民館や公園づくりに精を出してきましたが、気がついたら子供達は巣立ち、ジジ・ババの二人きり、あるいは独り暮らし状態になっています。

年金だけではとても介護施設にも入れないという切実な問題でありまして、年金をまともにもらっている者はいいですが、国民年金の方々も町内にたくさんいます。その方々は周辺の介護施設とかそういう今はやりのサ高住というところなんて毛頭入れません。それじゃあいったいどうすればいいのかということで私どもは地域コミュニティで「自助/共助/公助さらに近助」「互助」もあるらしいんですが、これを介護の5Gと呼びまして建設現場の5Sに習って呼び合っています。臨終期を迎えた町内の高齢者、最後の3つの階梯があります。

第1のステップ、「みんなの家」といいまして元気なものが集まって健康寿命を延ばすということで6年前に市の補助を得て開設して今日に至っております。

ステップ2は今申し上げております「若竹支え合いの家」。要支援の方々を地域で、ちょっと先行く人を元気な年寄りが見ていくということで、オープン準備室を始めました。

ステップ3は、いわゆるプロの介護施設の小規模多機能ホームの開設、誘致をしまして、この1.2.3のステップが地域において有機的に連携を持って進めていくことが大切だと思います。

若竹町における地域福祉の歴史として、実は平成21年に私が6町内ある連合町内会の会長をつとめていました時、ものすごく高齢化しているということで、その年から福祉部を作り、「若竹カフェ」、「若竹朝市」、「かよう会・こがね会」などの高齢者の居場所、それから平成26年（2014年）に先ほど申し上げました「若竹みんなの家(高齢者サロン)」を作りました。そして平成28年に「おらとこ若竹」を招致し今日に至っております。

順次簡単にご説明します。「若竹カフェ」は公民館で独り暮らしの方がスタッフと楽しく食事をするということで始めたものです。

それから「若竹朝市」は当時あったスーパーとかが無くなって大変ということで、今もって10年目を迎えています。面白いのは婦人部が設けたコーヒーコーナーが非常に人気を呼びまして、大勢の方がそこで1杯100円のコーヒーを飲んで、あんたどうしてる？ こうしてる？

久しいね、とって談笑して1時間ほど語り合っていくのが特徴です。

「かよう会・こがね会」は火曜日と金曜日、町内の有志がいろんなことをして、話し合うということです。

「若竹みんなの家」は、平成26年に一軒家を借り、高齢者の引きこもり・閉じこもり防止、限りなく健康寿命を延ばす、介護予防を目指すということで、とにかく健康長寿で引きこもりを無くしてくれという要望でやっています。みんなの家の活動は毎週水曜日手作りのランチ会、演芸、音楽会、健康をテーマとした催し、後援会、講習をやっています。年間大体2,300人を集めています。今は一軒家から若竹公民館に移設され、そこへ移って「若竹みんなのサロン」として進めています。私の特色として申し上げているのは、私の出身地の南砺市の同級生が立派な古民家を持っていて、そこを借りまして若竹町はこれからどうするのかということアカデミックに毎年やってまいりました。

最後に介護ハウス「おらとこ若竹」は介護のプロが来てくれまして、若竹町の地域密着型若竹方式の小規模多機能ホームで看取りまでやってくれるということで非常に心強く思っています。これでステップ3までが出そろったわけです。

遂に「若竹支え合いの家」が平成31年4月にオープンしまして、富山市の予算化を求めておりましたが本年度10月じゃないと出ないということで、それまでどうするというので、私どもが自腹をきって支え合いの家を月に2回準備室としてやっています。

このオープンについて北日本新聞も取り上げてくれました。ここまでするには先ほど申しました私の出身地であります南砺市が非常にこういった面では進んでいまして城端にあります「ひらすんま」、福野北部にあります「かようまいけ館」も視察しまして、これなら何とか出来るんじゃないかということで南砺市役所の方や、施設の方々も呼びまして講習会を開きました。場所については近くの民家をお借りし、朝がゆ会、カレーランチ会の食事などで全体で19名を集めて何とか場所と人、スタッフを確保しまして現在7名を利用者選定しまして月2回で進めています。主に食事会、昼食会を中心に利用料500円取って、血圧測定とかいろんなことをやっています。11時から午後の1時までで、簡単な体操とか食事前の誤嚥予防をやっています。利用者の発表コーナーもあります。新聞の効果は大きいもので富山市の北部の海岸通りからは是非視察させてくださいということで、自分たちもこれをやってみたいということ言ってもらって心強く思っています。

以上富山市南部における今までの地域の福祉活動「若竹支え合いの家」の報告を致しました。ご清聴ありがとうございました。

(岩城副会長)

ありがとうございました。ただいま本日高齢者を地域で支える積極的な取り組みをやっていらっしゃる3つの団体の方に活動状況などを報告していただきました。本当にありがとうございました。

若干時間がありますので委員の皆様方から、これまでの意見交換や活動報告などを踏まえまして、ご発言をお願いしたいと思います。ICTを活用して効率的・効果的なサービスを行っておられます宮崎委員からご発言をお願いします。

(宮崎委員)

ご指名ありがとうございます。NTT西日本の宮崎でございます。今日はたくさんのご活動内容のご説明ありがとうございます。大変勉強になりました。

私どもも高齢者の皆様や介護をなさる皆様お1人お1人や、あるいはケアに従事なさる方の負担を軽減するためにICTや通信サービスなどの技術の分野でお力添えになれることを一緒に考えながら、しっかりとこの課題に対応してまいりたいと考えていますので、どうぞ宜しくお願い致します。以上です。

(岩城副会長)

ありがとうございました。続きまして、地域での医療介護を支える立場から炭谷さんをお願いしたいと思います。

(馬瀬委員代理：炭谷氏)

富山県医師会の炭谷でございます。本来は馬瀬会長が来るべきでしたが所用があり代理で参りました。

富山県医師会では先ほどの資料の2にございますが様々な事業を展開しております。ただ実際に地域と結びついているのは、それぞれの郡市医師会、地域の個々先生ですので、そういった活動を支援するようなことを県の方々と協力して、かつ多職種、看護、介護、薬剤、歯科医師会その他たくさんの方と協力しながらやっています。地域医療をなるべく守るように頑張っています。またいろいろとあろうかと思っておりますので、教えていただければと思います。ありがとうございます。

(岩城副会長)

ありがとうございました。続きまして買い物支援や配食などを推進する立場から県生活協同組合連合会専務理事でございます若林さんから一言お願いします。

(小泉委員代理：若林氏)

富山県生活連合会の若林です。小泉会長本日欠席のため代理で私出席させていただきました。私ども生協は今2つの生協がありまして、宅配事業でご家庭の方に商品を配達する事業をメインで行っています。富山県内の15市町村と見守り協定を締結させていただいてまして、配達最中に、もしそういった方がいらっしゃれば連携して地域包括支援センターに連絡するなり、あとは県生協の方では福祉事業もやっていますので、そういった福祉の方と連携する取組みをやっています。

さらにコープ富山と合わせて13万人くらいの組合員がいますので、組合員同士の助け合い活動をしています。だいたい県生協の方で年間1,800時間の活動をしています。これは現在の組合員向けの活動ですが、組合員以外の、先ほどの黒田社長も言われていた、ちょっとした困りごと、草が生えたところをきちっとしようという困り事に対応する取組みもしないといけないのですが、なかなか組合員同士の助け合いなので、なかなか担い手がないという現状がありまして、やはりいろんな業者の方と連携しながら、ニーズはあるが、そこにお

手伝いに行く方がいないこともあるので、いろんな業種と連携しながら、そういった方々にお助けできるような取組みをしていきたいと考えています。以上です

(岩城副会長)

ありがとうございました。では、高齢者の外出や移動を支援する立場から県バス協会小竹理事から、一言お願いします。

(辻川委員代理：小竹氏)

バス協会でございます。かつてなく公共交通の重要性が叫ばれている時代と考えています。大変ありがたいことだと思います。

私ども、たまに朝ラッシュの終わった10時頃、路線バスに乗りますが、ほとんどの方が高齢の方々に、なかには杖をついているご老人や、かくしゃくと乗っているご老人もおります。私どもの事業は、そういった方々の役に立っているかと思うところです。簡単でございますが以上です。

(岩城副会長)

ありがとうございました。では、ICTを活用して効果的なサービスを推進する立場から牧野様からご意見をお願い致します。

(金岡委員代理：牧野氏)

インテックの牧野です。今日は金岡の代理で出席させていただきました。

今日いろいろお話を聞かせていただきながら、私自身も以前身内が富山で介護状態で自分は首都圏で単身赴任状態で、当時の行政の方々や、介護施設の方に大変お世話になって力添えいただいたと思い出していました。

ICTの側からということですが、いろいろサポートする側の支援できることと、サポートを受ける側で支援を受けるという両面で世の中のICT技術の動向に伴って、進化し続けていけるのではないかと感じています。

例えば個人の情報ということでデータベースの管理はこれまでもOA化を進めてこられたかと思いますが、そこから更にAI機能を入れて効率化を図ったり、マイナンバーの利用や個人情報の活用の仕方というの、法的なことはあるかと思いますが、カルテ情報の連携などはもっと進化していけると思います。

また、介護の現場の中で、例えば富山県と県立大学が今年から看護学部と工学部という学部体制へ、全国でもあまり例のない先進的な取組みをされたかと思いますが、その工学技術を使っての看護など、住民サービスを中心にとらえた時のいろいろな成果が出てくるかと期待できますので、県内のいろんなところに活用していけるのではないかと思います。

最後に先ほどの「まちのでんきや」の報告の最後のページに紹介されていますが、確かに世の中IoTといいますか、ありとあらゆるものがネットワークで繋がるのが可能になってきており、現在は県では5Gの対応をどうしようかということで、いろいろ先進的に取り組んでいる中で、1つ1つのものがセンサーを通じることによって情報活用ができる。例えば電気と

か水道だとかメーターがスマート化していくことによって、昔であれば郵便受けに新聞が2～3日たまっていて、あそこのお母さんどうなんだろうと心配されるところが、水道のメーター値が1日動いていないという情報をすぐに把握して早期のケアが実現可能な時代がいよいよ来るかと思います。もちろん電子メーターなど切り替えのものはあるとは思いますが高速で遅延が少なくて同時接続が可能になる5Gの時代になれば、照明のオンオフや、サービスに直結したものがすぐ近い段階で実現が出来るのではないかと思います。そういったことも期待しながら、いろいろご支援できることがあれば考えてみたいと感じています。ありがとうございました。

(岩城副会長)

ありがとうございました。

予定の時間がまいりましたので本日はこのあたりで会を閉じさせていただきたいと存じます。誠にありがとうございました。